叙事詩を誰に聴かせるか
―モンゴルの英雄叙事詩「ジャンガル」の語りを中心に―

D.塔亜(内モンゴル大学モンゴル学学院)

はじめに

最近、叙事詩の語りを聴くことをラジオを聴くこと、テレビを視ることと同一の行為であるように理解する人が増えている。しかし、新疆のオイラド族の人びとにとって、英雄叙事詩「ジャンガル」を語ることには独特な意義がある。すなわち、神々の世界に向けて語るときと人間の世界を対象として語るときでは、語りの意図は異なる。本稿は、新疆のオイラドモンゴル人のもとで行ってきたフィールド調査の資料に基づいて、「ジャンガル」などの英雄叙事詩が誰のために語られ、そこにどのような意義が込められているかに関して、聴き手側の視点からアプローチすることを試みる。

1　神々の世界へ

新疆のオイラド族の人びとでは、他界に住む神々たちは、この世に住む人間より「ジャンガル」などの英雄叙事詩を楽しみ、その神秘的な世界を堪能するものと考えられている。和静県に住むジャンガルチ(ジャンガルの語り部)ドルジ氏は、「ジャンガルの語り部が『ジャンガル』を語るとき、われわれ人間だけが聴くものではなく、近隣の山川の神々たちも集ってきて、それを聴くのである。彼らは私たちより楽しんで聴き、喜んでいるのである[1]」と語ってくれた。特克斯県に住むジャンガルチ　アラーシ氏は、「われわれの地域に住むお年寄りたちは、英雄叙事詩『ジャンガル』の主人公であるジャンガルのことを、守護神として信じており、『ジャンガル』を聴くときには、『ジャンガル」の守護神に祈祷しながら聴くのである[2]」と語った。神々たちは、「ジャンガル」を楽しんで聴くだけではなく、それを喜ぶときには「ジャンガル」を聴かせてくれた人びとに対して尊敬を払い、謝意を示すことがあると、オイラドの人びとは信じている。言いかえれば、ただ単に神々たちを喜ばせるために「ジャンガル」を語るのではなく、神々を喜ばせ興趣を誘うことによって、人々は特定の目的を達成することを望むのである。それには、災害の予防、災厄の排除、狩猟の獲物の確保などが挙げられる。

---

[1] 1999 年 8 月 28-31 日まで、和静県の巴倫台区の旧巴倫台郡に住むジャンガルチ　ドルジ氏の口述による。

[2] 1999 年 10 月 8 日、特克斯県のホジルト・モンゴル郡に住むジャンガルチ　アラーシ氏へのインタビューによる。

1-1　災害を予防するため

家族の一年間の無病息災、幸福、繁栄を祈るため、正月に、自分たちの祖先をはじめ故郷の神々たちのために、「ジャンガル」を語らせる習慣がある。烏蘇市のジャンガルチ　ノルワイ氏は、正月 1 日に、王族の宮殿に招かれ、「ジャンガル」を語っていた経験がある[3]。和布克賽爾県では、「毎年の正月 1 日から 3 日、あるいは 5 日まで、王族、領主、活仏、大臣、僧侶など、当時の有力者たちは、互いに新年の挨拶を交わし、そして正月が終るまで、王族の宮殿で、場所を設け、著名なジャンガルチたちを招き、『ジャンガル』を語らせていた」[J. 巴図那生 1986]。尼勒克県に住むジャンガルチ　カナラ氏は、「尼勒克県のウォールド氏族の人びとは、正月の 1 日から 15 日まで、僧侶を招き読経をさせ、そして 15 日から 30 日までは、『ジャンガル』を語らせる習慣があった[4]」という。とにかく、20 世紀中ばまで、新疆のオイラドの広い地域では、その地の有力者や庶民の間で正月に「ジャンガル」を語らせる習慣が残っていた。

毎年春季には、豊潤な降雨、牧草の繁茂、家畜の繁殖、人びとの健康を祈祷する目的で、オボー祭祀のときにも「ジャンガル」を語らせることがあった。烏蘇市、昭蘇県、額敏県、精河県などの地域の人びとは、オボー祭祀のとき、ジャンガルチを招き、「ジャンガル」を語らせていた。このような習慣に関して、精河県に住む老人たちによると、「オボー祭祀のとき、ロス[5]の王や、地域の神々たちを喜ばせるため、『ジャンガル』を語らせるのである。日常的には運勢をよくしてもらうため、『ジャンガル』を語らせる[6]」。

1-2　災害を追い払うため

オイラドモンゴルでは、春季や夏季の干ばつで牧草が生育しないために、家畜が痩せ衰える被害に直面することがしばしばある。その際、氏族や村の人びとは水の精霊を喜ばせ、雨乞いの目的で「ジャンガル」を語らせる。烏蘇市の老人たちは、「春季と夏季、雨が降らないときに『ジャンガル』を語らせると雨が降る[7]」と考えている。昭蘇県に住むジャンガルチ　オロンバヤル氏もまた、「わたしの故郷では、夏季『ジャンガル』を語ると雨が降る[8]」と語っていた。

雪害や干ばつ、あるいは洪水などの自然災害の際に「ジャンガル」を語ることが自然災害を克服するために有効であると人びとは信じている。和静県のジャンガルチニーマ氏は、「暴風、洪水、雪害などの自然災害が拡大する恐れのあるとき、『ジャン

---

[3] 1999 年 11 月 8 日、烏蘇市のチャガン・スム村に住むジャンガルチ　ノルワイの息子バトジェ僧へのインタビューによる。
[4] 1999 年 10 月 17 日、尼勒克県の第四中学校の教師カナラ氏へのインタビューによる。
[5] ロス：地下世界に住む諸霊の総称。
[6] 1999 年 10 月 25 日、精河県のダンダガィ村のジャンガルチ　アンジェの息子ドルジ氏（1947―）へのインタビューによる。
[7] 1999 年 11 月 2 日、烏蘇市のタビルハイト牧場のオトー氏（1932―）へのインタビューによる。
[8] 1999 年 9 月 26 日、昭蘇県第 76 団の第 11 連に住むジャンガルチ　オロンバヤル氏へのインタビューによる。

ガル』を語らせると、これらの災害を食い止めることができる[9]」と語っている。額敏県に住むジャンガルチ　ベーシン氏によると、「われわれの故郷では、『ジャンガル』を語ると、風雨が止む」という。

家畜が斃死したり、家財が被害にあったりするとき、家畜や家財を災難から守るためにも「ジャンガル」を語らせる。和静県のジャンガルチ　ニーマ氏の話では、「私の故郷の年寄りたちは、家畜に伝染病が広がり、死ぬとき、『ジャンガル』を語らせると、伝染病の拡大が弱まり、家畜の被害が少なくなると信じている[10]」という。これらの習慣には、仏教の影響が見られる。烏蘇市のジャンガルチ　ジグジェ氏によると、「『ジャンガル』には、ジャンガルの呪文がある。それは仏教における緑多羅菩薩の呪文と同じようなご利益がある。そのため、ジャンガルチを招いて『ジャンガル』を語らせた家庭では病魔がいなくなり、それによって気運が高まり、幸福な暮らしが可能になり、家畜が繁盛するのである[11]」という。

このように、牧畜社会では伝染病が蔓延する際には、「ジャンガル」の守護神の霊力によってこれらの病魔を退治し、安泰を取り戻す目的で「ジャンガル」を語らせるのである。1945 年、烏蘇市のゴビ砂漠において、急性黄疸型肺炎が流行した際に、多くの家庭がジャンガルチを招き、「ジャンガル」を語らせた[12]。昭蘇県に住む老人たちは、「『ジャンガル』の語りを聴けば家の中の障害が消える[13]」と信じている。尼勒克県のジャンガルチ　ジャムボ氏は、「我が故郷では年配のジャンガルチたちは、『ジャンガル』の語りを聴いた人びとのところでは障碍が消え、平穏な暮らしを送ることができると言う[14]」と語っている。このように、「ジャンガル」の語りを聴くことは、病気平癒の祈願や疫病神を撃退する儀礼として理解されている。

1-3　狩猟の獲物に恵まれるため

狩猟にでかける前、多くの獲物に恵まれることを祈願し、山や川の主や狩猟を司る主＝マニハン・テンゲルに対して「ジャンガル」を語り聴かせることがある。ジャンガルチたちや老人たちの話によると、他界とは、この世と同じように、皇帝や庶民（山川の精霊）がいるのである。庶民たちは牧畜を営んでおり、その家畜がすなわち狩猟の対象となる動物たちである。そして、他界に棲む神々もこの世の人間と同様、娯楽を好むのである。特に彼らは「ジャンガル」を聴くことが大好きだという。有名なジャンガルチが「ジャンガル」を語り、彼らを喜ばせると、その返礼として、自分が所有する「家畜」である獲物を人間に授けるのである。一方、神々に対して過ちを犯し、彼らを憤慨させるなら、神々は獲物を下賜しないばかりか、そのような不届きを働い

---

[9] 1999 年 9 月 3 日、和静県のジャンガルチ　ニーマ氏へのインタビューによる。
[10] 1999 年 9 月 3 日、和静県のジャンガルチ　ニーマ氏へのインタビューによる。
[11] 1999 年 9 月 3 日、烏蘇市のジャンガルチ　ジグジェの娘バダマカンドゥー氏へのインタビューによる。
[12] 1999 年 11 月 2 日、烏蘇市のタビルハイト牧場のオトー氏（1932―）へのインタビューによる。
[13] 1999 年 10 月 13 日、特克斯県のニュチュグン村に住むボルダィ氏（1920―）へのインタビューによる。
[14] 1999 年 10 月 13 日、尼勒克県のホジルタイ村のジャンガルチ　ジャムボ氏へのインタビューによる。

た人間の家庭や氏族にも被害を与えるとみなされている。そのため、新疆オイラドのジャンガルチたちは、「『ジャンガル』を語れば、神々が喜ぶ、特に守護神たちの下衆（げす）たちが喜ぶのである[15]」と考えている。こうした観念については以下のような伝承がある。

> 昔々七人の狩人が数日間獲物を探したが、なかなか出くわすことができなかった。時に獲物と出くわすことがあっても、それを仕留めることができなかった。空腹も限界に達した。そして彼らは密林の松の木の根本で夜を過ごすことになった。彼らの中に、一人のジャンガルチと一人の易者がいた。夜になると、他の 6 人がジャンガルチに向かって、「あなた『ジャンガル』を語ってください。『ジャンガル』を語れば、山川の神々が喜ぶ。喜んだ神々はわれわれに獲物を与えたり、あるいは獲物を仕留めることを助けてくれるかもしれない」と頼んだ。ジャンガルチは、彼らの言葉を受け入れた。そして「ジャンガル」を語り始めると、山や森の中から、様々な形相の神々が各方面から集ってきてジャンガルチの体の上に座りはじめた。最後に、びっこをひいた一人の神がやってきたが、座る場所をみつけることができず、止む無くジャンガルチの鼻の上に座った。ジャンガルチは「ジャンガル」を語っているうちに、突然くしゃみをした。すると、ジャンガルチの鼻の上に座っていた、びっこをひいた守護神がその揺れで地面に落ちた。この一部始終を見ていた易者は思わず失笑してしまった。するとジャンガルチは、「･･･何日も空腹を我慢し、みなのために「ジャンガル」を語っているのに、何故ぼくを嘲るのか」と怒鳴り、語りを止めてしまった。そして狩人たちは互いに口論をはじめ、語りの場は騒然となった。その向こう側では、神々の王が、神々を集め、「汝は別所に席をとらず、何故ジャンガルチの鼻の上に座ったのか？汝がジャンガルチの鼻から滑り落ちるのをあの易者が見て、失笑したせいで、今夜の『ジャンガル』の語りは台無しになった」と、びっこをひいた神を責めた。そして、びっこをひいた神の乗り物である鹿を、狩人たちに獲物として与えることにした。翌朝、狩人たちは、遠く行かずに大きな鹿を容易に仕留めることができた[16]。

このような「ジャンガル」の語りに関連する伝承にはいくつかのバージョンがあるが、その多くは狩人たちが狩猟にでかけ、何日も獲物に恵まれないときジャンガルチを呼び、「ジャンガル」を語らせ、その結果、山や川の守護神から恩沢を受けるという話である。その筋は、オリヤンハイ族のあいだに伝承されている「アルタイ賛歌の起

---

[15] 1999 年 11 月 10 日、烏蘇市のチャガン・スム村のジャンガルチ　デルゲイ氏へのインタビューによる。
[16] 1999 年 8 月 28-31 日まで、和静県の巴倫台区の旧巴倫台郡に住むジャンガルチ　ドルジ氏の口述による。

源物語」や「トボショル[17]の起源物語」などのプロットや思考と共通している［Tuyabagatur 1995:51-53］。新疆のオイラド族の狩人のあいだにジャンガルチが多くいるのも、こうした文化的な伝承の名残や背景に関係するものと考えられる。

2　神々と人間世界との間

さらに、英雄叙事詩は、神々の世界に向けて語られるだけではなく、神々の世界と人間世界の両方を対象としていると思われる事例が多く見られる。

2-1　戦場

戦場や兵士の駐屯地のなかにおいて、「ジャンガル」を語らせる習慣がある。ウォールド氏族のジャンガルチ　チメド氏は、新疆三区の革命[18]のとき、戦場で「ジャンガル」を語っていた[19]。1920 年ごろ、旧土爾巴扈特部南路の活仏シンチン氏は、巴音布魯克において、兵士を徴集し、駐屯地のなかで「ジャンガル」を語らせていた［T.賈木査 1988:358］。また、カルムィクのジャンガルチ　バサンゴワ氏は、第二次世界大戦のとき、戦場に向かう兵士たちに、「ジャンガル」を語っていた［桑嘎杰耶娃 1984:25］。オイラド族の老人たちの認識では、戦場で「ジャンガル」を語ることには、次のような二つの意義づけがあったという。その一は、「ジャンガル」の守護神や軍神の援護を受けることにより、敵側を援護する守護神を脅かして撃退し、さらに、敵側の威力を弱体化させて戦闘勝利を治めることができるというものである。その二は、「ジャンガル」の英雄たちは兵士たちの守護神となり、戦場での兵士たちの魂に宿り、敵が放つ矢や武器から身を守ってくれるとみなされる。すなわち、「ジャンガル」およびその英雄たちの勇敢な戦闘のプロットは、兵士たちの士気を発奮させ、兵士たちは「ジャンガル」の英雄たちに自己を仮託して、英雄同様に勇敢に戦うという意識的な暗示にかけられるという側面が考えられる。新疆オイラド族の多くの氏族たちは、「ジャンガル」を自分たちの祖先であるという連想のもとに伝承する風潮があり、そこには「ジャンガル」の英雄たちの勇敢な行為を氏族たちの人びとの気骨と信念の象徴として尊崇しているものと考えられる。

2-2　婚礼

オイラドモンゴルの社会では婚礼で「ジャンガル」が語られていた。20 世紀中頃まで、新疆の烏蘇、和布克賽爾、伊犂などの地域のジャンガルチたちは婚礼に招かれ「ジャンガル」を語っていた。さらに、カルムィクのジャンガルチ　エーライのオボライ氏は婚礼で「ジャンガル」を語っていた［桑嘎杰耶娃 1984:22］。このように、ジャン

---

[17] トボショル：「ジャンガル」を語るときに伴奏する楽器の一種。
[18] 新疆三区の革命：1944 年に起こった新疆の北方に住む少数民族の独立運動を指す。
[19] 1999 年 10 月 22 日、尼勒克県の烏蘇村に住むチョロンバト氏（1956-）へのインタビューによる。

ガルチたちは、婚礼に招かれて「ジャンガル」を語り、祝宴を盛り上げていたことは確かである。そのため新疆では、「ジャマグル葱[20]は飯に遅れず、ジャンガルチは婚礼に遅れず」という諺が流布している。

周知の通り、英雄叙事詩「ジャンガル」には、主人公である英雄ジャンガルとその他の英雄たちが嫁取りにでかける前に、まず、「ジャンガル」を語らせる場面が頻繁に見られる。例えば、「ジャンガル」の「ホンゴルの嫁取りの巻」［元資料(4)　p.175］［元資料(5)　p.228］、「八歳のナイルバト英雄が魔王の国から天女を救い、天の鉄帯の英雄を退治し、水王の皇女の嫁取りの巻」［元資料(6)　p.240］などの叙事詩において、ハーンたる王の皇女たちは輿入れする前に、「わたしは『ジャンガル』叙事詩を聴いてから門出したい」［元資料(5)　p.260］という願いを申し出る場面が見られる。そのとき、「ジャンガル」の英雄たちはすぐさまにみすぼらしいジャンガルチに変身し、ハーンたる王の豪邸にやってきて、「ジャンガル」を語り、皇女たちの心を惹くのである。そのように「ジャンガル」語りのモチーフは、婚礼における「ジャンガル」の重要性を示しており、このような特徴は広い地域から採録されている「ジャンガル」の各種のテキストに認められる。

婚礼における「ジャンガル」語りは、婚礼の式場が穢れの空間であるとみなす、オイラド族の独特な観念によるものと考えられる。オイラドの人びとは、婚礼には多くの人びとが参加する一方、様々な悪霊も参集して来るとみなされる。そのため、「婚礼には髑髏（どくろ）が転がってくる」という言い方がある。このように、婚礼において「ジャンガル」を語る行為は、「穢れのある空間を浄め、それを神聖な空間に転化し、悪霊たちを追い払い、新婚の二人を諸悪から守る意味がある」と老人たちは語る。換言すれば、婚礼で「ジャンガル」を語ることは、一方では、「ジャンガル」の守護神および語りの霊力によって、家庭を築く新婚の二人の悪霊、障碍を退散させるための行為であり、他方では、新婚夫婦の順風満帆な人生を願う意味が込められていると考えられる。また、「ジャンガル」の英雄たちに倣って、無病息災、延命長寿であることを祈願するという側面も見られる。また、さらには、婚礼では、「ジャンガル」の他の巻ではなく、主に嫁取りの巻が語られ、それによって婚礼にいっそう賑やかな雰囲気が醸し出されることも事実である。

おわりに

新疆のオイラド族のジャンガルチたちは英雄叙事詩をこの世の人間に聴かせるために語るだけではなく、異界に君臨する神々の世界にも聴かせる目的で語るのである。このように、英雄叙事詩「ジャンガル」の語りは、表向き直接的には「人間の世界」の聴き手に向けられるが、本質的にはその彼方の「神々の世界」に在る聴き手に向け

[20] ジャマグル葱：山に自生する野ネギの一種。

られる。この二つの「世界」の喜怒哀楽を巧みに語り、それを表現し、彼らに生きる望みを持たせるのが、語り手であるジャンガルチの仕業である。神々の世界にも悩みごとがあり、それを叙事詩の詞で解消する。また、神々の世界で暗躍し、人間の世界に近寄っては被害をもたらす疫病神や悪霊をも叙事詩の詞で降伏させる。神々の世界に向かって英雄叙事詩を語る行為は、語り手であるジャンガルチと聴き手である神々との対話の具現化である。

この意味で、英雄叙事詩の語りについて異界での聴き手である神々の性格、役目、特徴、神験などを総合的に視野にいれて研究することが重要であると思われる。それがさらに英雄叙事詩の発生、発展、伝承のメカニズムの解明に寄与するものと期待される。

参考文献

J. 巴図那生

1985《J̌angγar》−un tuuli ba Qobogsair−yin ǰangγarči−nar−un tuqai baičaγalta−yin medegülte (《J̌angγar−un tuqai ögülekü−ni》qoyaduγar bodi, Sinǰiyang−un arad−un keblel−un qoriy−a,1986−on)

1995 << АЛТАЙН УРИАНХАЙН БААТАРЛАГИЙН ТУУЛЬС . ТУУНИЙ ЭХ СУРВАЛЖ ОВОРМОЦ ШИНЖ >> (ХАРЬЦУУЛСАН СУДАЛГАА) . БАЯН -- ОЛГИЙ АЙМГИЙН ХЭВЛЭХ УЙЛДВЭР . 1995 он .. pp. 51-53

T. 賈木査

1988 Sinǰiyang mongγolčud−un dotor−a《J̌angγar》−un tuuli−yin tarqaǰu qadaγalagdagsan tuqai(70 bölögtu《J̌angγar》,γurbaduγar bodi, öbör mongγol−un sinǰilekü uqaγan tegnig mergeǰil−un keblel−un qoriy−a)

桑嘎杰耶娃

1984 《〈江格尔〉的演唱者》,《民族文学译丛》，第二集，史诗专辑，第二册，中国社会科学院小数民族文学研究所，一九八四年九月，北京，25 页 。

元資料(4)

1985《J̌angγar−un eke materiyal》(todo üsüg),dörbedüger bodi, Sinǰiyang−un arad−un keblel−un qoriy−a,1985,ürümči qota.

元資料(5)

1985《J̌angγar−un eke materiyal》(todo üsüg),tabuduγar bodi, Sinǰiyang−un arad−un keblel−un qoriy−a,1985,ürümči qota.

元資料(6)

1985《J̌angγar−un eke materiyal》,ǰirγuduγar bodi, dumdadu ulus−un arad−un aman ǰoqiyal uralig−un keblel−un qoriy−a.